企業の価値ここにあり

出雲発のオンリーワン企業

小松電機産業株式会社
代表取締役 小松昭夫（こまつあきお）

地方経済といえば、いまや不況の代名詞といってもいいくらい、いい話を聞くことが少ない。ましてや過疎や人口流出といった課題を抱える山陰地方は、厳しいビジネス環境の土地柄だ。

ところが、そんな逆風をものともせずに、業績を伸ばしている企業がある。独自の技術でオンリーワン商品を開発し、注目を集めている小松電機産業（島根県松江市）である。

誰も真似できない新商品で市場創造

主力商品の一つが、高速シートシャッター『門番』である。これは、建物の内部や出入り口に取り付け、室内の空調効果を高めたり、外部からの埃（ほこり）や虫の侵入を防ぐもので、人や車が近づくとセンサーが感知し、高速で自動開閉する。通常のスチールシャッターでは実現できなかった防寒・防塵（じん）・防虫（ぼう）性を備え、冷暖房が必要な工場や倉庫、衛生管理が大切な食品業界などでの需要が高い。

昭和六十年に発売した『門番』は、ビニールを使って蛇腹（じゃばら）式に折りたたんで開閉する方式だった。スチールシャッターがメインの時代に画期的な新商品として取り上げられ、大反響を呼んだ。

ところが間もなく、一部のユーザーから「開閉装置が故障した」という苦情が寄せられるようになる。調べてみると、使用頻度が想定した開閉回数をはるかに上回っていることがわかった。

社長の小松昭夫さんは頭を抱えた。少なくとも三倍の開閉回数に耐えられるものに改善しなければ、今後もユーザーからの苦情は続くだろう。しかし、現在の蛇腹式では機能的に無理がある。かといって、スチールシャッターのような巻き上げ式にすれば、高速にならない。

「どうすればいいのか」――日夜そのことばかり悩み、考え抜いた。ある日、新幹線の中でふとアイデアがひらめいた。

「下水道用の塩化ビニールパイプの中にモーターを組み込めば、うまくシートが巻き取れるのではないか」。すぐに車内から会社に電話して、試作品をつくらせた。これが成功して、翌六十一年に改良した『門番』を商品化。いまや全国で＝＝％という圧倒的なシェアを占める。

もう一つの柱は、上下水道計測・制御・監視システム『やくも水神』だ。これは、地域に分散している浄水場、配水池、ポンプ場、処理場などを電話回線で結び、各施設の稼働状況や水量・水質をコンピュータで集中的に計測・制御・監視するシステムである。平成三年、科学技術庁（当時）が「注目発明」に選定。現在では、インターネット、iモードでも遠隔操作が可能になり、どこからでも管理できるようになった。納入した事業体は、全国約三千カ所にのぼる。

「水」をキーワードに地域貢献

『門番』と『やくも水神』は、それまでになかった新しいマーケットを創造した。それゆえに小松電機産業は、出雲（いずも）が生んだ代表的なベンチャー企業として、全国に名を知られるようになった。これらのユニークな商品を生み出す発想は、どんな

▲こまつ・あきお

1944年、島根県生まれ。'73年、小松電機産業を創業。'94年、HNS研究所（現・財団法人人間自然科学研究所）を設立し、会社経営のみならず、海外・国内の社会問題に対して積極的に提言・活動している。(財)人間自然科学研究所理事長、小松電機産業㈱代表取締役、孔子文化大学客員教授。

ところから生まれてくるのだろうか。

昭和三十八年に松江工業高校を卒業した小松さんは、地元の農機具メーカーに就職。時代は手動機械である「農機具」から、自ら動力源（エンジン）を持つ「農業機械」への転換期だった。その中で、小松さんは小型コンバインのトランスミッションの設計・開発に携わる。職場は発明好きな人たちの集まりで、発想は豊かだったが、機械工学の知識がない。その点、高校で機械工学を学んだ小松さんは重要な戦力となり、トランスミッションの開発を主導した。このときの経験が、小松社長の原点になっているという。

「稲作用の機械というものは、世界中のどこにもありません。水と土と植物に、機械文明をどう融合させるのか。自分たちの頭の中から生み出すよりほかに方法がなかったのです」

柔らかい泥の中に重い機械を入れる。大切な稲を傷つけずに、かつ効率的に作業を進める。相反する条件をどう両立させるか――小松流創造工学の神髄は、このとき培われたのかもしれない。

上：高速シートシャッター『門番』
左：上下水道計測・制御・監視システム『やくも水神』

その後、紆余曲折を経て、農業用ポンプの修理会社（現在の小松電機産業）を設立。小松さんは、「水」とは切っても切れない縁で結ばれてきた。

島根県といえば、中海・宍道湖を抱える水の都でもある。近年、小松電機産業では、農業集落排水を処理する新技術の開発にも成功した。富栄養化に悩む湖の浄化にも役立つと期待されている。

水の確保・浄化は、いまや地球規模の課題だ。

「今後さらに製品・技術を進化させ、水の総合管理の一翼を担い、人と環境との調和、持続可能な社会の構築に貢献したい」と語る小松社長。卓越した創造工学を持つ地方ベンチャーが、世界に躍り出る日が待ち遠しい。

（取材・文　編集部）